

平成29年度 SSHベトナム海外研修 報告

【2457：奈良学園高校】

1 実施目的

奈良はベトナムと最も古くから交流のあった地であり、同国の国立大学ならびに私立高校とのサイエンス交流を中心とした「SSHベトナム海外研修」を継続実施する。

現地では、科学者、大学生、高校生と理科的テーマで交流を行い、本校生は、英語で自分たちの課題研究テーマをプレゼンテーションしディスカッションする。このサイエンス研修を行うことで、本校生の科学への興味・関心および能力を高めるとともに、コミュニケーション手段としての英語力を高め、国際的資質を身につけさせることを目的とする。また、同国での環境研修や教育訓練省表敬訪問も行うことで、国際的資質の育成をさらに効果的なものにする。

2 研修先及び研修内容（具体的研修内容・効果）

（1）国立ハノイ工科大学

①研修内容

本校と国立ハノイ工科大学間の、両国にとって初の高大連携サイエンス交流事業を継続した。

②手法

ア 大学教員による英語講義の聴講（講師2名）

Dr. Ms. Nguyen Thuy Nhung Chung 先生(As.Prof.)「ベトナムの動植物について」

Ms. HOANG THANH YEN 先生(Officer of Thang Long Ruin Management Board)

「ハノイの文化財・遺跡について」

コーディネーター：ハノイ工科大学前学長 Mr.Hoang Xuan Lan 教授

イ 本校生徒による理科課題研究英語プレゼンテーション並びに、質疑応答。

ウ 大学生の英語プレゼンテーション並びに、質疑応答。

エ 同大学の環境技術研究所（IET:Institute of Environmental Technology）には京都大学大学院地球環境学堂のハノイ教育研究拠点事務所があり、特定助教（博士）2名が常駐して、グローバルCOEプログラムの調査研究を行っている。同研究所を訪問し、同研究所の Mr.Nghiem Trung Dung教授より、研究所の設立意義と現状について講義を受ける。さらに、同博士と同行の谷川先生との、ベトナム都市開発上の問題点についての協議を傍聴した。

③効果

ア 母国語が英語ではないベトナムの教員や大学生と、英語によるサイエンス交流を行うことで、生徒は世界共通のコミュニケーション手段としての英語の重要性を理解することができた。

イ 生徒は、プレゼンテーションの質疑応答や研究者との交流・協議の傍聴を通して、将来の科学技術系人材に必要な語学力や国際的資質を養うことができた。

（2）私立グエンシュ高校

①研修内容

本校の姉妹校、私立グエンシュ高校との間で、サイエンス交流事業を行った。

②手法

ア グエンシュ高校の英語授業への参加。

イ 生徒による理科課題研究英語プレゼンテーションと質疑応答。

ウ 親善交流。

③効果

ア 母国語が英語ではないベトナムの高校生や教員と、英語によるサイエンス交流を行うことで、生徒は世界共通のコミュニケーション手段としての英語の重要性を理解することができた。

イ 同年代のアジアの高校生との交流を通じて、サイエンスへの興味・関心を高めることができた。友人として長くつきあっていく素地ができた。

ウ 交流を通して、国際的資質を養うことができた。

エ 異文化理解の一環として、アジア地域の学校生活の様子を知ることができた。

(3) ホアビン省タンラック郡ナムソン村

①研修内容

ホアビン省のタンラック郡ナムソン村において、「ベトナム環境研修」を継続実施した。

②手法

ア ベトナム民族博物館において、訪問するムオン族のナムソン村について、博物館の学芸員と同行講師の谷川先生の解説による事前学習を行った。

イ ナムソン村集落内の建物配置の特徴と意味を学習した（谷川先生フィールドワーク）。

ウ ナムソン村を訪問し、本校の「環境実習」で学習した内容と関連づけながら、東アジア圏に残る、徹底した持続可能な循環型の里山生活を研究した（本校教員によるフィールドワーク）。

エ 農業改善指導の学習（NPO法人 Seed to Table 伊能まゆ氏によるフィールドワーク）。

オ 里山散策の中で、水質検査と食用・薬用植物について、村の青年団（中高校生を含む）と共同研究を継続した（コーディネーター：伊能氏）。

③効果

ア 米を主食とする両国の、農村生活の共通点と相違点を理解することができた。

イ 照葉樹林と亜熱帯多雨林の気候の違いを体感し、生物の多様性とその保存の必要性を理解することができた。

ウ 多くの国際的な科学技術支援により、戦争の惨禍とそこからの復興を遂げているベトナムの環境政策や農業の実体を知ることができた。

エ 持続可能な循環型の農村生活が今も営まれていることを知り、環境保全に対する知見を深めることができた。また、異文化理解の一環として、共産主義国家の人々の生活のあり様を学ぶことができた。

(4) タイビン省ホン（紅）河河口域

①研修内容

タイビン省ホン（紅）河河口域でのマングローブ調査を継続実施した。

②手法

ア ベトナム戦争で壊滅的な打撃を受けたホン河河口域のマングローブ林が、日本を含む多くの大学や研究機関・NGOなどの援助により、見事に再生された様子を実地調査した。

また、本校教員の指導による現地フィールドワークを継続実施した。

イ 校内で継続実施している水質調査を、同河口域数カ所でも実施し、本流・支流・養魚場などでのデータを収集し、生徒によるベトナム継続研究の資料とすることができた。

（案内者 養魚場経営者 Thuy Pham Van 氏）。

③効果

ア 熱帯・亜熱帯域の河口に広がるマングローブ林の生態系内での役割を理解し、世界各国の協力で実現した再生の現状を知ることができた。

イ エビ養殖場・養魚場など、河口域の産業利用の様子を見学し、その課題と問題点を理解することができた。

ウ 本校のベトナム研究の基礎データとなる、河口域でのマングローブ林調査と水質調査を本年度も実施し、データ収集を積み重ねることで、生徒自らが科学的な視点からの考察を行うことができるようになった。

（５）ベトナム教育訓練省

①研修内容

日本の文部科学省にあたる教育訓練省を表敬訪問し、職員と英語で懇談を行った。

②手法

日本からの国際交流使節として、ベトナム教育訓練省を表敬訪問し、英語で懇談した。

③効果

- ア 政府職員との懇談を通して、日本とベトナムとの国レベルの関係状況を知ることができ、国際的な資質の向上と、交流使節としての自覚を醸成することができた。
- イ 英語によるコミュニケーション能力を高めることができた。

（６）ベトナム民族学博物館

①研修内容

53の民族からなる多民族国家ベトナムを知り、「ベトナム環境研修」のための事前学習を実施し、訪問するナムソン村集落の建物配置の特徴と意味を学習し、本校の「環境実習」で学習した内容と関連づけながら、東アジア圏に残る、徹底した持続可能な循環型の里山生活と自然環境の特徴を理解した。

②手法

博物館の学芸員の解説と共に、研修で訪問するムオン族が暮らすホアビン省タンラック郡ナムソン村の高床式の家屋の特徴や持続可能な循環型の里山生活の様子について、同行講師の谷川先生に建築工学と地域空間論の側面から解説をしていただいた。

③効果

生徒達がハノイで接する最大多数のベト族の人たちと、「ベトナム環境研修」で訪れるムオン族の人々との家屋、言葉の違いや循環型の里山生活などの違いを前もって理解しておくことで、生徒達はスムーズに村の人々との交流を受け入れることができ、日本では体験することのできない、多民族が一つの国で暮らす実際の様子を知り、それを可能とする自然環境について考察する基礎知識を得ることができた。

（７）ドゥンラム村

①研修内容

ハノイ市ドゥンラム村を訪問して、15世紀から受け継がれた村内の建物の家屋調査を行い、同時に周辺の池と田畑の生物調査も行い、地域空間論から見た村の建物配置と構造を理解する研修を行った。

②手法

国立奈良文化財研究所が調査したデータを元に、ベトナムの平地（デルタ）に暮らすベト族の村の建物の空間配置と生活様式を知る実測研修を行うと共に、奈良県橿原考古学研究所の主任研究員奥山誠義先生にご講義をいただいた最先端の保存修復科学技術が、この村でどのように生かされているのかを学習した。

③効果

- ア 同行講師の谷川先生による事前研修と現地での実測指導により、異なる民族・異なる環境ごとに合理的な建物の空間配置があることを知り、村人との対話の中で、祖先より受け継がれてきた生活様式の特徴を理解することで、国際的な資質の向上を図ることができた。
- イ 日本が主導的に協力してきた、最先端の保存修復科学技術を知ることができた。

3 実施期間

平成29年12月16日（土）～平成29年12月21日（木）（5泊6日）

4 参加人数

（1）引率者

奈良学園高等学校教諭 3名（氏名：澄川冬彦，梅岡千恵，加藤美智子）

同行講師 1名（氏名：谷川竜一 金沢大学 新学術創成研究機構 助教）

（2）生徒

奈良学園高等学校生徒 12名（男子5名，女子7名）

Ⅱ年C組SSH発展コース ◎大橋 祐輝，○井上 麻由，○恒吉 優里奈，大西 健太郎，
川口 綾音，佐藤 若葉，篠原 つばさ，中村 美南，
西川 啓将，平野 萌，前田 悠貴，宮田 朋尚
（◎印 キャプテン，○印 副キャプテン）

5 事前学習内容

交流準備学習（「SSH演習」）

- ・学校設定科目「SSH演習」の授業で、担当の英語科・理科教員・ALTによる、サイエンス交流での課題研究プレゼンテーションの準備。
- ・7月20日（水）大阪府立大学大学院生命環境科学研究科 北宅善昭教授による東南アジアのマングローブ林に関する研修を行い、枯れ葉剤によって一時は壊滅したベトナムのマングローブ林に関する理解を深めた。
- ・9月14日（水）大阪大学文学研究科 桃木至朗教授によるベトナム文化研修を行い、簡単なベトナム語会話も学習した。
- ・10月24日（火）地歴科教員による東南アジアの歴史文化気候等、異文化理解事前研修。
- ・10月25日（水）生物科教員による東南アジアの環境・生物多様性保全に関する事前研修。
- ・11月2日（水）和歌山大学システム工学部 養父志乃夫教授による東南アジア里地里山環境学研修を行い、東南アジアの農村文化を理解した。
- ・11月11日（土）同行講師谷川先生による安堵町中家住宅家屋調査フィールドワークを実施した。

6 事後学習内容

- ・毎日のホテル帰着後のミーティングにおいて、その日の学習内容を確認し整理した。
- ・「生徒研究論文集」に掲載する報告書の作成。
- ・英語プレゼンテーションとディスカッションの成果を基に、英語で研究論文を作成する。
- ・校内報告会で成果を報告する。
- ・本校SSH研究発表会で成果を報告する。
- ・ナムソン村，ドンラム村での研究データの整理と考察。

※なお、研修の成果については、帰国後直ちに本校ホームページに研修報告を掲載し、「生徒研究論文集」と「平成28年度SSH研究開発実施報告書」に詳細を掲載すると共に、SSHホームページ「活動事例データベース」に掲載する。

7 研修実施の様子

研 修 行 程

日 程 平成29年12月16日（土）～12月21日（木）

5泊6日（うち1泊 機内泊）

派 遣 団 高校2年生SS発展コース生徒12名（男子5名，女子7名）
引率教員3名，同行講師1名 計16名

宿 泊 全日 ハノイ デュー ホテル泊

日 程 詳 細

（1）12月16日（土）

10：30 関西国際空港発

14：30 ハノイノイバイ国際空港着

事前学習と交流先グエンシュウ高校バディ生徒との事前交流

ハノイ ノイバイ空港到着後、17日（日）に訪れるムオン族についての学習を、交流先のグエンシュウ高校のバディ生徒12名とともにハノイ市内の民族学博物館で実施。



(2) 12月17日(日)

ベトナム環境研修

ベトナム ホアビン省タンラック郡ナムソン村（ムオン族）環境研修
チェン集落青年団との交流。里山フィールドワークとベトナム北部有用植物図鑑
並びに、集落内の水質検査の共同研究と集落の方々との昼食会



(3) 12月18日(月)

私立グエンシュ 高等学校にて全日サイエンス交流

9:00 登校時生徒交流並びにバディ生徒12名との交流開始

- 交流内容
- * グエンシュ副校長先生ごあいさつ
 - * グエンシュ生徒による伝統音楽パフォーマンス
 - * 本校生徒英語プレゼンテーションと質疑応答
 - * 本校生徒パフォーマンス



10:30 生徒間の交流

- * グエンシュ生徒との交流
- * 教員間交流

11:45 ランチ会食 (ホール)

12:30 昼寝時間

13:45 英語通常授業参加 (講義は英語, 45分)

14:35 ベトナム交流作品制作

グエンシュ生徒と協働で一つの交流記念の作品を仕上げる。



16:15 学校での交流終了

16:30 グエンシュ生徒と市内散策

18:00 **夕食会 (グエンシュ高校側教員3名+生徒12名)**

(4) 12月19日(火)

＜A班（7名）＞ **ハノイ工科大学サイエンス交流**

ハノイ工科大学サイエンス講義

(1) ベトナムの動植物について (Ms. Nguyen Thuy Nhung Chung 准教授)

(2) ハノイの文化財・遺跡について (Ms. HOANG THANH YEN , Officer of Thang Long
Ruin Management Board)

派遣生徒英語プレゼンテーション 並びにディスカッション

環境科学研究所研修

研究所長Mr.Nghiem Trung Dung 教授との協議

昼食 コーディネーターMr. Lan前学長と3名の講師、工科大学生10名と会食



教育訓練省 表敬訪問

International Cooperation Depart. の
Officer と懇談



(5) 12月19日(火)

<B班(5名)> **タイビン省ホン河河口域でのフィールドワーク**

ホン河河口デルタのフィールドワークとマングローブ林研修

養魚場経営者 (Mr. Pham Van Thuy さん) のお話し

河口域と養魚場の水質検査



養殖魚での養殖魚計測と同定

養魚池並びに周辺クリークの水質調査

養殖魚の計測と同定



(6) 12月20日(水)

ハノイ市ドンラム村フィールドワーク

世界遺産への登録を目指している同村の巡検と家屋調査並びに、田畑と池の生物調査を実施。



第1部 6名ずつの班に分かれて、

- ① 同村 Hai 氏邸の家屋調査と聞き取り調査
- ② 同村内の田畑の空間配置の特徴と養魚池での魚類調査並びに、生物調査を実施。お互いの情報を交換した後、村内を巡検して村の施設の空間配置を確認した。

第2部 班を入れ替えて①②を実施。

